第77回 憲法を考える映画の会

生きていてよかった　千羽鶴

手元資料

●日時：2024年８月11日（日）
　　13：30～16：30
●会場：文京区民センター ３A会議室

●プログラム
13：30～13：40　映画について
13：45～14：50　映画『生きていてよかった』（52分）
15：00～16：10　映画『千羽鶴』(67分)
16：10～16：30　トークシェア
・映画を見て考えたこと

■手元資料 目次

資料❶　この二つの映画を見て考えたいことと今回の関連資料
資料❷　映画『生きていてよかった』について
資料❸　映画『千羽鶴』について
資料❹　「平和をきずく児童・生徒の会」のあしあと
資料❺　原爆・核実験・放射能汚染・内部被曝について考える映画・映像
資料❻　昭和30年代年表（政治･社会･教育・市民運動など）
資料❼　第76回「アトミックカフェ」2024/６/29 参加者感想から
資料❽　憲法を考える映画の会 あとおいニュース #48

憲法を考える映画の会

〒185-0024　東京都国分寺市泉町3-5-6-303
TEL & FAX：042-406-0502
ホームページ：http://kenpou-eiga.com/
E-mail：hanasaki33@me.com

資料❶　この二つの映画を見て考えたいことと今回の関連資料

【この二つの映画を見て考えたいこと】

　憲法を考える映画の会は、これまで76回の上映会を行ってきました。映画の後には、いま見たばかりの映画の感想を中心に、一人一人が考えていることを出し合うトークシェアという時間を設けています。
　そうした中で良く出る意見として、こうした会に若い人の参加が少ない、若い人にこそ、こうした映画を見て考えてほしいと思うのだが、と言う意見があります。とくに憲法のことや戦争のことをどのように若い世代に伝え、いっしょに考えて行くことができるかは大きな課題です。

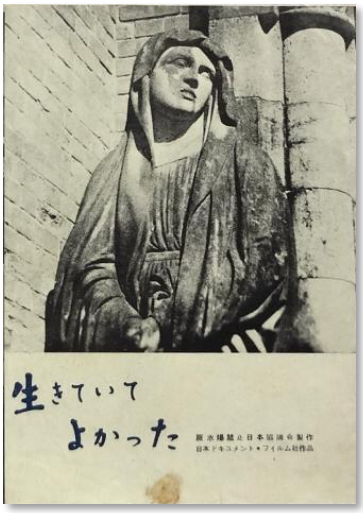
　そこで今回は、自分たちは子どもの頃、若い頃、どうだったか、と考えてみることにしました。ちょうど8月は原爆が落とされた月、戦争に敗けて終わった月でもあります。

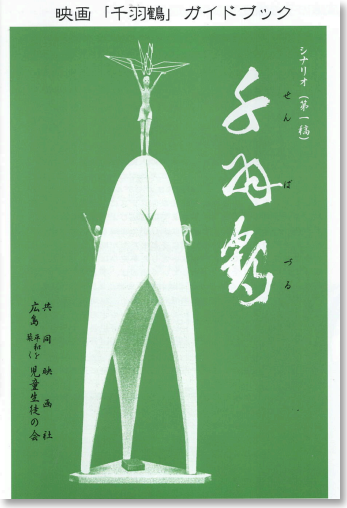
　まず、子どもの頃、原爆のことを初めて知ったのは、いつ、何でだったのだろうかと思い返してみました。
　アサヒグラフか何かに載っていた、背中の焼けただれた人の写真だったかも知れません。そのページを開くのも、とても怖かったことを覚えています。
　同じ小学校低学年の頃、今回上映する映画『千羽鶴』を、学校の映画教室で見た記憶があります。
　「原爆」というものが、投下されたその時の悲惨な状況だけでなく、放射能という形でその後もずっと人々を苦しめる、自分と同じ位の女の子が死んでしまうとても悲しい話だと思ったと覚えています。

　かけっこが早く、元気いっぱいの貞子は、原爆病（白血病）という不治の病（当時）にかかってしまいます。旧友たちは鶴を千羽折れば、病気が回復するという話を信じ、みんなで鶴を折るのですが、その甲斐なく貞子は12歳の若さで死んでしまいます。
　映画が公開された昭和30年代に、この映画を見て、原爆＝放射能＝白血病というつながりから、「原爆は戦争が終わってからも人々に死をもたらす恐いもの」として、幼い気持ちに刷り込まれるには十分でした。
　いま、この『千羽鶴』という映画を見直すと、原爆そのものの悲惨さを描いているのはもちろんですが、子どもたち（小学生･中学生）が、「このような悲劇を繰り返さないために、何をしたら良いか」、みんなで話し合って考え、その一つとして、貞子と折り鶴をかたどった「平和の像」を作ろうという運動に取り組んだところに、力が入っていることがわかります。

　映画の解説は、この映画のDVDに添付されている「ガイドブック」に詳しく書かかれています。（この資料4ページの**「映画『千羽鶴』について」**と言う欄で紹介しています）そこには、この映画が出来た頃の政治情勢や子どもたち、あるいは教育をめぐる情勢が詳しく書かれています。

　これらの映画ができた1950年代なかば、いわゆる30年代は、戦争の混乱がまだ残り続ける中、大きな変化があった時代です。人々の中に「戦争はもう嫌だ」という気持ちが強く残っているにもかかわらず、朝鮮戦争、冷戦、核実験競争、そうした中にあって再軍備がすすめられ、60年の新日米安保条約が強行されます。
　そうした「憲法に反して軍備を強める国」にしようとする政治の動きに対して、「二度と戦争を起こすまい」「子どもたちを再び戦場に送るな」の言葉のもとに、平和教育の運動、組合活動、原水爆禁止運動が盛り上がりを見せます。しかしながらそうした運動や教育もまた政治的な圧力によって抑え込まれ、分断されていきます。
　そうした背景は、子どもの頃、この映画を見たときには全く感じていませんでした。しかし、そうした背景を知るといっそう、このような映画をつくって、子どもたちに見せて、戦争のこと、原爆のことを伝えていきたいとした人々の熱意が強く感じられます。





　そして映画を通して知った私たちは、その後およそ60年間、映画の画面が、戦争や原爆のイメージとして自分たちの中に残って、二度と戦争をしてはいけない、核兵器をなくさなければならないと考える気持ちになったのだろうと思います。

　この資料の６ページから10ページにかけて**「原爆・核実験・放射能汚染・内部被曝について考える映画・映像」**という欄を設けています。（この欄は、今年の2月に**『サイレント･フォールアウト』**を上映して以来、「憲法映画祭2024」**『アトミック・カフェ』**と原水爆関連の映画の上映が続いてので、毎回少しづつ原爆関連の映画を追加してきたものです）
　原爆や核兵器のことをみんなで考えていくことができる映画がこんなにたくさんあると言うこととともに、どの映画も何とか原爆や戦争の悲惨さを伝えて、「二度と戦争をしてはいけない」「核兵器をなくさなければならない」と言うことを伝えようとして制作者の気持ちがこもっているものと思います。

　子どもであった私たちは、その頃どのような思いで戦争を知り、原爆や、核戦争をとらえていたでしょうか。そして今、戦争は無くならないばかりか、核兵器の使用の危険もまた強まっています。それだけでなく私たちの国が積極的に戦争を始めようとする危険が迫っています。
　どうしてそうなってしまったのか、子どもたちを取り巻く教育や社会の動き、変化をもう一度きちんととらえ直していきたいと思います。
　そうした思いから、この資料の11ページから13ページにかけては**「戦後教育関連年表」**を掲載させていただきました。この年表は2022年11月に上映会を持った**『教育と愛国』**の時に作ったものに、追加して再掲載したものです。
　戦後の政治、教育、市民の運動がどのようなものをめざしてどのように変わってきたのか、もう一度その全体の流れを見直して、自分たちがどのように教育され、あるいは教育されないで、原爆や戦争のことを考えてきたかを見つめ、それを若い世代、子どもたちにどのように話していくか、に役立てたいと思っています。
　ひとりひとりが、自分は原爆のことを、あるいは戦争のことを、いつ、何で知ったのか思い出し、その時どんなことを胸に抱いたかもう一度思い起こしてみましょう。そして、その時に感じた子どもの自分の気持ちを、今の子どもたちに、まわりの大人たちにも伝えていくことにしましょう。（花崎）

資料❷　映画『生きていてよかった』について

　この映画『生きていてよかった』を紹介する記事が、朝日新聞5月16日の「政治季評」の欄にありました。「原爆開発描いた『オッペンハイマー』　映画の熱量 描かれぬ被害想起」という明治大学教授の重田園江さんの書かれたものです。
　その記事の中に、次のように書かれています。「『オッペンハイマー』のもうひとつの裏面は、日本の原爆被害だ。映画の中でオッペンハイマーはヒロシマ・ナガサキの犠牲者に心を痛めるが、そのイメージは抽象的である。だがそれを補って余りある原爆の「遺産」が日本にはある。戦後に多くの原爆文学が生まれ、また原爆にまつわる映画も多い。中でも圧倒されるのが、亀井文夫監督のドキュメンタリー『生きていてよかった』（1956年）である。」
　早速、この映画『生きていてよかった』を見直しました。

【作品の解説】
　1955年8月に開かれた第1回原水爆禁止世界大会で、被爆者救援運動の一貫として企画された作品。急性白血病やケロイドなどに苦しむ被爆者たちの苛酷な生活の実態にカメラを向けている。（国立映画アーカイブ「生誕百年ー映画監督 亀井文夫」NFCニューズレターより）

　映画は、第一部「死ぬことは苦しい」、第二部「生きることも苦しい」、第三部「でも生きていてよかった」の章立てに分かれて構成されています。
　亀井文夫監督は、この作品を作ったねらいについて「こんな不幸な目にあいながら、なお強く生きぬこうとする人たちがいる。日々のつまづきの中で気をくさらせたり、安価な絶望に浸ったりすることの愚かさを思われたい」と話しています。（映画.com『生きていてよかった』より）
　ドキュメンタリー映画という言葉さえ知られていない当時、外に出たがらない被爆者自身をカメラに捉え、かつ、その苦しさ、悲しさを話してもらうというのは、並大抵のことではなかったと思います。想像するに丁寧に、丁寧に話して、映画のねらいを伝え、説得してそうした場面が撮れたのだと思います。それは監督自身の強い意志を持った「ねらい」があったからだと思います。この映画に出たことがきっかけとなって「人前に出るのが平気になった、かえってありがたかった」との手紙が多くきたそうです。

　街ゆく人々の中にはケロイドの娘さんがいます。新しくなった日赤病院には、急性白血病の息子さんを見守って不安におののくお母さんがいます。撮影期間中でもそうした患者さんの死に立ち会うことになります。
　原爆とその後の原爆症の悲惨さを伝えるだけでなく、映画は被爆者に対する当時の社会の冷酷さも伝えています。原爆による傷跡、ケロイドのある人への日常的な差別があります。女性は結婚をあきらめ、銭湯で入浴を断られ、男性は就職できない。原爆の被害者であるのに、身を隠して生活をしなければならない。そうした苦しさ、つらさが語られます。

　街頭では被害者への国家補償の請願運動がなされています。そしてこの映画では、被爆者とその家族による核実験反対運動が描かれていきます。
　顔に原爆の時の傷が残る山口さんは、世界各地から広島に集まった原水爆禁止世界大会で「私たちが死んだら、原爆の恐ろしさをだれが世界中に知らせることができるでしょうか」と訴えます。盲目の孤児を収容する広島明成園で保母を勤める女性は「私たちのようなものでも、不幸な子供たちのために役にたてる」と喜びます。原爆で目が見えなくなった少女、福富さんは学校の弁論大会で「被爆以前の自分に戻してもらうことより、二度とこのような爆弾を落とさないでほしい」と強く訴えます。みんな声をあげること、原爆とは何をもたらすものかを知らせるために傷跡を敢えて見せていくことの意味をつかんでいきます。職場に帰った彼女は、そこにも同志のいることを見つけたと喜びます。
　原爆の悲惨さを伝えるだけでなく、差別する社会への怒り、それと闘っていく力強さ、それが原爆をなくすためにと向かっていく強い意志を映画は描いていきます。

　長崎の渡辺さんは、被爆当時の骨折から十年間、寝床で機械編物をつづけて働いてますが、10年間外に出ませんでした。映画のスタッフは彼女を十年ぶりの市街見物に車で誘います。その彼女の目を通して新しい長崎と、彼女の思い出にある長崎とが対比的に示されていきます。兄が亡くなった、あゝあの場所で彼女自身に思いがけない涙がわき出してきます。
　浦上の爆心地を公園にするためにニコヨン仕事をして働いている信仰厚いお母さん。彼女は被災でねじれた娘の手をロウ細工にとって原爆記念館にかざります。世界の人々のためには「忍従だけが神の御心だとは考えられなかった、世界中の人たちに自分の娘の手を見てもらいたかった」と話します。

　この映画をどのように見ていくか。私は原爆投下から10年たったこの当時、人々の原爆に対する意識、認識がどのようなものであったか、それを知りたいと思いました。当時この映画を見た人もヒリヒリと傷が痛む、あるいは深い不安をのぞき込んでいるような気持ちだったと思います。
　そして時代が変わって今、そうした原爆への認識はどうなっているのか、もし当時と今と違っているのであれば、どうしてそれは伝わらなかったのか。
　同じことは、アメリカの人々、いや世界中の人に原爆の悲惨さ、危険さ、イメージが伝わっていないことにも言えると思います。原爆が、今も自分たちにも、家族にも無惨に降りかかるものとしてイメージされるように十分に伝えることができていないということでしょう。
　古い映画であっても、その時代それを作った人々が何を描こうとしたのか、そして何よりその時代、その映画を見た人がどのような思いをもってその映画を見たのか、想像しながら映画を見ていきたいと思います。そして時代を超えて、また映画を見直し、今を考え、自分たちは何をしていったら良いか考えていけるように、上映して役立てていきたいと思います。

【スタッフ】
監督：亀井文夫　勅使河原宏　山崎聖教
製作：大野忠　撮影：黒田清巳　瀬川浩
音楽：長沢勝俊　編集：仁保春緒　守随房子
録音：奥山重之助　大橋鉄矢　解説：山田美津子
1956年制作／52分／日本映画／ドキュメンタリー
配給：ドキュメンタリーフィルム　原水爆禁止日本協議会

【上映の問合せ・DVD購入情報】

日本ドキュメンタリーフィルム
〒153−0042　東京都目黒区青葉台3−18−10
TEL：03−3463−0950

資料❸　映画『千羽鶴』について

『千羽鶴』

映画「千羽鶴」は1955年に原爆症で亡くなった広島の少女佐々木禎子さんと、原爆の子のエピソードにもとづいて1958年に製作公開されました。

【ストーリー】

小学校6年生の佐々木さだ子は歌が得意、かけっこは男の子も叶わないほどの快活な少女でクラスの人気者でした。

さだ子が六年生になった時、北川先生（禎子の担任だった野村先生がモデル）という男性教諭が赴任してきます。いさかいの絶えないクラスに、北川先生は「団結」をクラスの目標とし、卒業までに達成しようと提案します。北川先生の思いを、子どもたちは少しづつ理解していきます。

この映画の前半、体育の時間に子どもたちが助け合いながら山に駆け登り、山頂で禎子が歌い出した美空ひばりの『こだまは歌うよ』にクラス全員が唱和していく場面は、子どもたちが「団結」を手に入れていく様子が良く表れています。

お祭りの夜、さだ子を突然病魔が襲います。原爆症でした。さだ子は入院生活を余儀なくされます。入院中のさだ子は、回復を信じ、祈るような思いでノートに白血球の数を記録していきます。しかしさだ子の願いを欺くかのように、白血球の数は増える一方です。

さだ子の同級生たちは、さだ子を気遣い、頻繁に見舞いに訪れます。

卒業式の日、式に出席できないさだ子に代わって父親が卒業証書を受け取りに来ます。そしてこの日、さだ子の同級生たちは「団結の会」をつくり、ずっとさだ子を励ましていこうと誓います。

同じ病室でそんなさだ子を見守る少女がいました。映画の中でさだ子から“佳代ねえさん”と呼ばれているこの女学生は後に『サダコ･虹基金』を設立することになる大倉記代さんがモデルとなっています。

同じ病棟の子どもが亡くなった時、自分もあんな風にして死んでいくのかかと、死の恐怖を訴えるさだ子。佳代姉さんはそんなさだ子を励ます。（この場面は、大倉さんの著書『思い出のサダコ』にも描かれています。）

佳代姐さんから、鶴を千羽折れば病気が良くなるという話を聞いたさだ子は、懸命に鶴を折り始めます。そのせいか、さだ子の容態は良くなり、8月6日の記念日には外泊を許されるまでになります。しかし、家族と一緒に平和記念公園へ向かう途中、さだ子の容態が急変します。そしてさだ子は六百余羽の折り鶴を残し、この世を去ります。

「団結の会」の子どもたちから、さだ子のために記念像を建てようという話が持ち上がります。子どもたちは、広島で開かれた全国中学校長会議で手作りのビラをまくなどして、記念像建設の運動を盛り上げていきます。こどもたちによって「広島平和を築く児童生徒の会」も結成され、運動は全国に広がっていきます。

そしてとうとう子どもたちの平和への思いが結実した「原爆の子の像」が平和記念公園にその姿を現します。

【子どもたちの輝きを伝える】

広島、長崎被爆に続く1954年の第5福竜丸の被爆事件は日本国民を憤怒させ、原水爆禁止の国民的運動へと広がります。

その思いを日本の映画人は、54年に『生きものの記録』（黒澤明監督）、55年に記録映画『生きていてよかった』（亀井文夫監督）、『ゴジラ』（本多猪四郎監督）、56年に記録映画『世界は恐怖する』（亀井文夫監督）、『純愛物語』（今井正監督）、『第五福竜丸』（新藤兼人監督）などの作品に刻みます。映画『千羽鶴』も、その社会的高揚の中で誕生しました。

木村荘十二監督は、56年に『長崎の子』を撮影。この作品も被爆地でけなげに生きる子どもたちを描いています。映画『千羽鶴』製作ニュースNo.1には、『長崎の子』を広島で上映した際『千羽鶴』映画化の話が出て実現となったとあります。

木村荘十二監督は、中国の満州映画協会で働いた体験から、侵略戦争への反省に立った次のようなメッセージを、原爆の子像の完成を祝って広島の子どもたちに贈っています。

「私たち大人はみなさんが幼かった頃、あるいはまだ生まれていなかった頃、恥知らずの侵略のための戦争を引き起こし、中国をはじめ多くの人々を不幸に陥れたばかりか、そのため私たち自身まで戦争の痛手を負い、そしてあれから13年もたっても今ですら死の恐怖に怯えさせられているあのむごたらしい原爆の攻撃までも受けたのでした。

（中略）私たちはみなさんが少年少女の純真さで、強く原水爆に反対され、進んで平和を築くためにはっきりとした決心の表現として今日、原爆の子の除幕式を迎えられることを心からお祝いします。

みなさんも平和を築くための第一歩の仕事は、すでにこれだけでも日本の歴史の中でも数少ない日本の子どもたちのすばらしさを具体的に行動で表現したものとして永久に残されるでしょう。」

戦後日本国民は「戦争放棄」の新しい憲法を歓迎し、教育においても「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期する」（旧教育基本法）“民主主義”をスタートさせます。原爆の子の像を造ったのは、まさにその憲法と民主主義でした。完成した映画『千羽鶴』を当時の東京都教育委員会は「戦後民主主義教育の成果と高く評価、“特選”としています。一方、文部省は「教育上好ましくない」との判断から『千羽鶴』を“選定”にすらしませんでした。

1949年にアメリカは、日本の“再軍備を容認”50年に朝鮮戦争、警察予備隊の創設（再軍備）トレッドパージ。53年に予備隊を自衛隊に改編、同時に公教育における教師の政治的意思表明を禁止する教育二法を制定させました。文部省“選定はずし”のきな臭い背景です。

しかし、木村監督の「永久に残されるだろう」の予言どおり、サダコと原爆の子の像は世界中に広がり、子どもたちに、希望と勇気を与えるエピソードとして輝いています。

映画『千羽鶴』も、その輝きを未来に伝える作品です。　　（映画「千羽鶴」ガイドブックより）

【制作スタッフ】
監督：木村荘十二　脚本：諸井篠次
企画：石川泰紀　徳毛宣策
製作：坂斎小一郎　織田良一郎
撮影：木塚誠一　美術：小林政義
音楽：小町昭　照明：村瀬栄一
編集：岸 富美子
助監督：島崎嘉樹　山口逸郎　加藤盟
製作：共同映画社　中国･四国共同映画社　広島平和を築く児童生徒の会

【出演者】
菅井美智子（佐々木貞子）石井治子（雨宮せき）
川東美代子（真庭美枝）福岡和子（三ツ沢和子）
森下義秀（矢島元）土井一男（正木彦一）
島田金次郎（島村一政）吉田譲司（関口実）
木内三枝子（南佳代）島田屯（貞子の父）
三芳久子（貞子の母）田尾勝（兄･弘）
加土恵子（せきの母）小川満（元の兄）
吉沢久嘉（北川先生）加藤嘉（田坂校長）
中川進介（猪川先生）永田靖（八代医師）
他：広島の児童生徒父兄

1958年製作／67分／日本
配給：共同映画社
劇場公開日：1958年

資料❹　「平和をきずく児童・生徒の会」のあしあと

「平和をきずく児童・生徒の会」のあしあと

［昭和三十年］
10月25日　佐々木禎子さんが原爆症でたおれた。十二人目。
11月10日　幟町中学の旧友が、全国中学校校長大会にゆき、平和を訴え〈原爆の子〉の像をつくるビラをお願いした。
12月25日　禎子の旧友が「こけしの会」をつくり、毎月命日の日に集まることにする
［三十一年］
01月28日　広島市内小･中･高校生ひとつになり、「広島平和をきずく児童・生徒の会」を結成、平和への宣言をし、会則、役員をきめる。
03月25日　事務所を児童文化会館に置き、像を建てる全国のお友達への呼びかけをし、趣意書を送る。
03月26日　会の新聞「平和」第一号を発行
04月25日　街頭募金をし、見日委員交代で事務所に来て事務をとる。
07月01日　イギリス、ハンガリヤなど外国からの激励の手紙が来た。
07月22日　「こけしの会」文集『こけし』を発行
08月06日　世界の子どもが手をつなぐ運動をおこし、ペン･パルを開始
08月09日　委員長中村正司、長崎世界大会に参加、外国代表へ会ノメッセージを手渡した。
10月10日　像の制作者選考にかかり、大人の美術家に相談。
10月15日　像の製作が東京芸大教授菊地一雄先生に決定、制作費400万円
10月20日　広島アメリカ文化センター館長、ノーマン・カズンズ氏を訪ね、アメリカの友達との文通を依頼。
10月28日　菊地先生来広、制作計画を立てられた。
12月31日　像の募金を締切る。3160校、530万が円が集まった。
［三十二年］
02月27日　総会を開き会計報告をした。
03月10日　像の模型が出来あがり菊地先生来広。
05月05日　新役員決定、新年度行事計画を立てた。
06月30日　原爆症死没児童、生徒の調査をした。
07月27日　共同映画社企画の映画〈千羽鶴〉を承認、製作者に加わった。
08月05日　特集号「平和」第四号を出した。
08月06日　明成園慰問、灯ろう流し。その他の平和祭行事をした。
08月09日　委員長鉄増亘、委員佐々木雅弘、東京世界大会へ参加。
10月09日　来広のインド、ネール首相に会のメッセージ、像の写真を手渡した。
12月21日　映画〈千羽鶴〉第一稿が出来、検討会を始めた。
12月24日　遺族を招きXマスの会を催し、原爆病院を慰問した。
12月25日　像の石膏完成
［三十三年］
01月15日　像の頂の少女像が新制作広島展会場に陳列された。
02月15日　総会を開き新役員をきめ。像の除幕、映画〈千羽鶴〉への準備をととのえる。
02月20日　セイロン留学生シルバ君が盗難にあい、見舞い募金を開始。
03月20日　映画〈千羽鶴〉の決定稿ができ発表会をした。
04月15日　〈千羽鶴〉クランクインが開始される。
04月15日　像の基礎工事を開始
05月05日　全国のお友達を招いて、像の除幕式をする。

（豊田清史『千羽鶴　原爆の子の像の記録』「付録」より
日本ブックエース刊）

映画『千羽鶴』上映のお問合せ、およびDVDの購入：
共同映画株式会社（東京都港区南青山4丁目18番21号南青山スカイハイツ504号）
ホームページ：https://www.kyodo-eiga.co.jp/　TEL: 03-5466-2311

資料❺　原爆・核実験・放射能汚染・内部被曝について考える映画・映像

広島長崎における原子爆弾の影響―長崎編―　1946年　84分　ドキュメンタリー　米国戦略爆撃調査団製作　日本映画社撮影
日本学術研究会議の原子爆弾災害調査研究特別委員会の学者たちによって行われた、原子爆弾の影響調査を記録したドキュメンタリー。爆撃から数日後の荒廃した街や被爆で苦しむ人々の姿など、2 発の原子爆弾がもたらした悲劇をありのままに映し出す。1946年に完成 しながらもアメリカによって没収され、内容が機密に触れるという理由からアメリカ国内で の公開もされることなく空軍基地に保管されていた“幻の原爆映画”が、65 年の歳月を経て誕生。完成当時の状態のまま鑑賞できる作品。

長崎の鐘　1950年　94分　劇映画　大庭秀次監督　若原雅夫　月丘夢路
原子医学の研究に一生を捧げた医学者･永井清博士は、医大卒業を前にして専攻を物理療法科に変更した。この頃放射線医学は医大においてはほとんど軽んじられ。聴診器に頼る古くからの医師たちの迫害を受けていたほどである。その後、妻の緑の協力のもと幾多の困難を乗り越えて和和の研究成果を発表していく永井博士。しかしそんな中で、彼は医学者として寄りも、むしろ一人の人間として人類愛に目覚めていくのである。当時GHQの占領下にあった日本映画は原子爆弾の被害に関することはタブーの一つであったが、メロドラマというベールをかぶせることによって映画化が可能となった。新藤兼人、橋田壽賀子が脚本に参加。

原爆の子　1952年　97分　劇映画　新藤兼人監督　乙羽信子　滝沢修　近代映画協会　劇団民藝
1945年8月6日、広島に原爆が投下され、当時広島に住んでいた石川孝子（乙羽信子）は家族の中でたった一人生き残ったのである。戦後、瀬戸内海の小島で小学校の教師をしていたが、原爆被災の頃に勤務していた幼稚園の園児達の近況について消息を確認したいと思い、小学校の夏休みを利用して、久しぶりに故郷広島を訪れる。
孝子は元奉公人の岩吉と再会するが、彼は顔にケロイドが残り視力を失っていた。孝子は園児達の今を知るべく、彼らを訪ね歩く。原爆症で父親を亡くしたばかりの子、教会にひきとられ白血病に苦しむ子。孝子は岩吉の死後、孤児院に預けられていた孫の太郎をひきとり、帰りの船に乗る。

ひろしま　1953年　104分　劇映画　関川秀雄監督
広島にある高校。北川が受け持つ三年生のクラスで、生徒の大庭みち子が鼻血を出して倒れた。それは原爆による白血病が原因だった。このクラスでは、実に三分の一の生徒が被爆者だったのだ。あの日、ゆき子の姉は疎開作業中に被爆し、川の中で絶命した。遠藤幸夫の 父親は、建物の下敷きになり炎に包まれた妻を助けることができなかった。8万人を超す広 島市民がエキストラとして参加し、原爆投下直後の広島を再現した。ベルリン国際映画祭で長編劇映画賞を受賞した。

原爆の図　1953年　17分ドキュメンタリー　今井正+青山通春監督　岩崎昶製作　新星映画社
１９５０年代はじめの《原爆の図》制作と全国巡回展の様子を記録した貴重な映画

永遠なる平和を―原水爆の惨禍―　1954年　20分　ドキュメンタリー　日本映画新社　総評など11団体による制作委員会
1954 年、太平洋上での水爆実験で、日本の遠洋マグロ漁船第五福竜丸などが死の灰を浴び、乗組員 久保山愛吉さんらは急性放射能症と診断された。汚染マグロは廃棄され、放射能雨に人々は恐怖し、科学者たちは放射能による汚染調査に乗りだした。しかし、政府は米国の核実験に協力を表明。平和を求める人々は原水爆禁止署名運動を始めるも、久保山さんは面会謝絶状態になる。その夏の記録。

ゴジラ　１954年　97分　劇映画　本多猪四郎監督
これは驚きの映画だった。ポスターには「水爆大怪獣映画」という文字があった。だが、当時はB級映画あつかい。それでも観客は喜んだ。そして恐怖した。南の海で異変が起こり、怪獣が出現する。映画館内はどよめいた。東京や各地で大暴れ。科学者は正体を追求、群集は逃げまどい、防衛隊は戦うが・・・。怪獣のデザインはキノコ雲型まで考案されたが、ゴリラ型に。「水爆のある限り・・・」という科学者の警告は、ビキニの水爆実験への抗議として聞こえた。

生きものの記録　1955年　113分　黒澤明監督　三船敏郎　志村喬　東宝
歯科医の原田は、家庭裁判所の調停委員をしている。彼はある日、家族から出された中島喜一への準禁治産者申し立ての裁判を担当することになった。鋳物工場を経営する喜一は、原水爆の恐怖から逃れるためと称してブラジル移住を計画し、そのために全財産を投げ打とうとしていた。家族は、喜一の放射能に対する被害妄想を強く訴え、喜一を準禁治産者にしなければ生活が崩壊すると主張する。しかし、喜一は裁判を無視してブラジル移住を性急に進め、ブラジル移民の老人を連れて来て、家族の前で現地のフィルムを見せて唖然とさせる。
喜一の「死ぬのはやむを得ん、だが殺されるのは嫌だ」という言葉に心を動かされた原田は、彼に理解を示すも、結局は申し立てを認めるしかなかった。準禁治産者となった喜一は財産を自由に使えなくなり、計画は挫折。家族に手をついてブラジル行きを懇願した後に倒れる。夜半に意識を回復した喜一は工場に放火した。精神病院に収容された喜一を原田が見舞いに行くと、喜一は明るい顔をしていた。彼は地球を脱出して別の惑星に来たと思っていたのだった。病室の窓から太陽を見て喜一は、原田に「地球が燃えとる」と叫んだ。

無限の瞳　1955年 20分 ドキュメンタリー　成城高等学校生徒会
佐々木禎子さんの折り鶴にも影響を与えた、当時の学生たちの先駆的な平和運動を記録した貴重な作品。小学校の時に広島で被爆した千葉亮君は東京、成城高校に入学したが、白血病に襲われる。生徒たちが千葉君を救おうとカンパを集める運動を始め、集会やラジオで訴え、大学生たちの協力も得ながらこの記録映画を作り始める。運動が全国の高校生たちに“無限の瞳”となって広がって行く様子に驚かされる。
https://www.youtube.com/watch?v=IRKtyLPcs2w

生きていてよかった　1956年　56分　亀井文夫監督
前年の8月6日の第一回原水禁世界大会で救援活動の一つとして企画され、制作された原爆犠牲者のありのままの姿を記録した作品。第一回世界大会の宣言を聞きながら被爆者の娘さんが涙を流してつぶやいた言葉、「生きていてよかった！」がこの題名となった。亀井監督は当時、「世界で一番不幸な目に会った人たちの強く生きようとする姿から、どうか感じとっていただきたい」と述べている。

長崎の子　1956年　50分　劇映画　木村荘十二
原爆学級の六年生原田信夫は、ちいさな駄菓子屋を営むそぼと二人暮らし。信夫は新聞配達で祖母を助けていた。同級生の酒井五郎も新聞配達をしている。信夫も五郎も母を原爆で失った。原爆学級にやはり母のいない山根ゆり子が転校してきた。そして原爆学級の健康診断の日が来た。信夫と五郎は、白血病を思い起こして元気がない。元気なゆり子に励まされたのだが、そのゆり子が白血病のおそれがあると診断されたのだった。

資料❺　原爆・核実験・放射能汚染・内部被曝について考える映画・映像

純愛物語　1957年　132分　今井正　東映　江原真二郎　中原ひとみ　岡田英次
スリ集団の制裁から戦災孤児のミツ子を救い出す同じ戦災孤児という境遇の貫太郎。ミツ子はスリから足を洗う決意をするが、ふたりは共謀して再びスリに及ぶ。刑事に摘発されたふたりはそれぞれ更生施設に送られる。やがてミツ子の身体に異変が起こりはじめる。病変は、ミツ子が幼少期に広島で原爆に被曝したことと関係があるのだった。

世界は恐怖する―死の灰の正体　1957年　79分　亀井文夫監督
米ソによる核兵器開発、核実験競争が熾烈をきわめ、第五福竜丸事件が騒がれる中、科学的な観点から放射能の恐ろしさを解明していく。『生きていてよかった』（1956年）に続いて製作された亀井文夫監督の原爆ドキュメンタリー映画だが、多数の科学者や医者の協力を得てより科学的に考察していく。優れた科学映画として評価は高い。戦前の亀井文夫作品『小林一茶』と同様、徳川夢声による名調子のナレーションも聴ける。

千羽鶴　1958年　67分　劇映画　木村荘十二監督
昭和三十年秋原爆症で死んだ佐々木禎子という一少女の死を契機に、全国に起った「千羽鶴」 の運動を主題とした映画。貞子はかけ足が得意で、歌もうまかったので、いつもクラスの人 気者であった。その貞子が、急に入院した。原爆症ー。貞子は輸血を受けたが、白血球は減る一方だ。卒業の日がきた。子供たちの発案で「団結の会」が出来た。貞子は同室の佳代という高校生から折鶴を見せられた。鶴を千羽折ると病気が治るという。貞子も友だちも千羽を目標に鶴を折り出した。

第五福竜丸　1959年　107分　劇映画　新藤兼人監督
１９５４年3月１日、アメリカは太平洋ビキニ環礁で水爆実験を行った。焼津を母港とするマグロ漁船、第五福竜丸は、「死の灰」をかぶり、乗組員が被ばくした。無線長の久保山愛吉さんは、半年後の９月２３日、「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい」と言い遺して亡くなった。新藤兼人は、これをドキュメンタリードラマに構成した。久保山無線長に宇野重吉、妻に乙羽信子、共演に小沢栄太郎、千田是也、永井智雄、殿山泰司など。

二十四時間の情事　1959年　劇映画　アラン・レネ監督　ザジフィルム　岡田英次　エマニュエル･エヴァ
来日し、広島へ反戦映画のロケに訪れたフランス人女優が、日本人男性と知り合い、深い仲になる。2人の情事の際の会話が続く冒頭では、広島の原爆被害の惨状を訴える映像シーンが続く。 2人はともに第二次世界大戦で戦争による悲劇的な体験を有していた。日本人男性は米軍の原爆投下によって家族を全て失っており、フランス女性は故郷ヌヴェールでナチスの将校と恋仲だったが、戦後に周囲から糾弾や迫害を受けた過去を持っていた。

その夜は忘れない　1962年　96分　劇映画　吉村公三郎監督
雑誌記者の神谷（田宮二郎）は、原爆特集記事のために戦後17年目の広島を訪れる。しかし取材先では紋切り型の話しか聞けず、原爆の傷は既に癒えているように見えた。そんな中で出会ったバーのマダム・秋子（若尾文子）に惹かれていく神谷だが、彼女には秘められた被爆体験があった。男女の悲恋を通し、被爆の記憶の風化と、その奥にある癒えない傷を描いた先駆的な作品。

愛と死の記録　1966年　93分　劇映画　蔵原惟繕監督
吉永小百合が「キューポラのある街」のイメージをさらに発展させて演技派女優となった作品。昭和40年、レコードショップの店員和江と写真製版の熟練工幸雄とが出会った。20歳と24歳の青春は恋愛した。しあわせだったが幸雄は被爆者だった。和江はそれを知ってあたたかい愛をつらぬきとおす。戦後21年に、蔵原惟繕監督によって撮られた被爆青春映画だ。幸雄役は浜田光夫から渡哲也にかわったが、和江と幸雄の愛と死は見るものの心をゆさぶった。

原爆の圖　1967年　ドキュメンタリー　宮島義勇監督　丸木美術館

ヒロシマの証人　1968年　110分　劇映画　斎村和彦監督
1960年代、原爆症で倒れ亡くなる者が後を絶たないなか、貧しい被爆者たちが暮らす相生地区は、団地の建設計画によって立ち退きの対象となる。死の恐怖と生活苦に苛まれる被爆者たちは、やがてABCC（米国原爆傷害調査委員会）の非人道性を批判する医師たちとともに立ち上がる。被爆者たちの姿を通して戦後の広島を描いたディスカッション・ドラマ。本映画祭実行委員の山口逸郎が、初めてプロデュースに携わった作品でもある。

ヒロシマ・原爆の記録　1970年　30分　ドキュメンタリー　松川八州男監督　日本映画新社
映画的嘘を排し、遺されたモノを使って、原爆を受けたヒロシマとそこに生きていた人々を描き出そうとした作品。原爆投下一月後に撮影されたフィルム、資料館遺物や写真をコラージュした証拠資料による映像証言。

人間であるために　1974年　100分　劇映画　高木一臣監督
大阪の一老弁護士が提起し、その後、東京の青年弁護士がうけついだ、いわゆる「原爆裁判」を描き、現在大きな社会問題となっている被爆者に対する援護及び補償問題を追求する。

歩く　1975年　34分　ドキュメンタリー　監督　板谷紀之
被爆30周年国民平和大行進が、爆心地広島の平和公園に向かって東京夢の島の第五福竜丸前を出発した。この映画は、東京～広島を行進とともに歩き続けた撮影隊が、70日1000キロにわたって、心と心を結び平和をきずく「歩く行進、走るカンパ隊」を克明に記録した。監督板谷紀之は広島まで歩きつづけ、自らもキャメラをまわして完成させた。

はだしのゲン（第一部）　1976年　107分　劇映画　山田典吾監督　北星映画社配給
昭和20年4月、太平洋戦争も終わりの頃の広島。国民学校 2年のゲンは、わんぱく盛りの男の子。ゲンの父・大吉は、日頃から戦争に批判的だったが、町内会の竹やり訓練の時「この戦争は間違ってる」と言ったために“非国民”とののしられ、特高警察に逮捕されて拷問を受けた。そのため大吉の家族に、米を売ってくれなくなり“非国民の子”として、長男の浩二、姉の英子、ゲン、進次も周囲からいじめられるようになった。しかし浩二は“非国民”の重み をはね返すために予科練に志願、海軍航空隊に身を投じていった。そして 8月6日、午前8時。

ふたりのイーダ　1976年　99分　劇映画　松山善三監督　翼プロダクション

ピカドン　1978年　10分　アニメーション　木下蓮三監督
1945 年 8 月 6 日、午前8時15 分、人々はその時の太陽の百倍の閃光を “ ピカッ ” と言い、続いて襲った衝撃波を “ ドン ” と呼んだ。原爆は今も多くの人々を苦しめ、その恐ろしさは計り知れない。当時の様子をできるだけ正確に再現したこの作品には、不幸な出来事が繰り返されないよう、平和への祈りが凝縮されている。この作品がきっかけで1985 年広島国際アニメフェスティバルが実現した。広島の原爆を初めてアニメーションで描いた作品である。

資料❺　原爆・核実験・放射能汚染・内部被曝について考える映画・映像

青葉学園物語　1981年　103分　劇映画　大澤豊監督

もし、この地球を愛するなら　1981年　26分　ドキュメンタリー　テリー・ナッシュ監督

幻の全原爆フィルム日本人の手へ！　悲劇の瞬間と37年目の対面　1982年　72分　熊谷博子監督

トビウオのぼうやはびょうきです　1982年　19分　アニメーション　板谷紀之

アトミック・カフェ　1982年　87分　ドキュメンタリー　ケヴィン・ラファティ監督　ジェーン・ローダー監督　ピアーズ・ラファティ監督
米ソの原爆製造競争が激しかった当時、アメリカ政府は国民を安心させるために原爆PR用フィルムを製作した。原爆がいかに安全であるか、害のないものであるかをまじめに説いたこの映画は政府や軍部が国民に歴史上に残る嘘をついたことを実証するものであったが、本作はこれをさらに編集し、ドキュメンタリーの要素を持つシニカルなパロテ〝ィー映画にした。 収録されている当時の映像には、放射能に関する大嘘や捏造された報道が溢れており、米政府が行った大衆操作の恐怖を物語る。

にんげんをかえせ　1982年　20分　ドキュメンタリー　橘祐典監督/子供たちに世界に被ばくの記録を送る会映画製作委員会
１０フィート運動が生んだ原爆記録映画第一作目の作品です。アメリカ側が撮影した未公開のカラー原爆記録フィルムを、カンパを出し合って買い戻そうと著名人500人の呼びかけで始まった運動。買い戻したフィルムの中の自分と35年ぶりに対面した長崎の片岡さんは絶句する。廃墟と化した広島、長崎の凄まじい限りの原爆の惨状を、赤裸々に映し出している。

予言　1982年　41分　ドキュメンタリー　羽仁進監督　平和博物館を創る会配給

ヒロシマ・ナガサキ 核戦争がもたらすもの　1982年　46分　ドキュメンタリー　早川正美監督　岩波映像販売

歴史=核狂乱の時代　1983年　116分　ドキュメンタリー　羽仁進監督　被ばくの記録を送る会

せんせい　1983年　103分　劇映画　大澤豊監督
1945年8月9日、長崎に原爆が投下された翌日、入市被曝し、「急性骨髄性白血病」により32歳の若さでこの世を去った小学校教員山口竹子さんをモデルとして、子ども達とのふれあい、彼女の死を通して平和の尊さと、命の大切さを描いている。当時、原作「夾竹桃の花の咲くたびに」は、多くの人に読まれた。

この子を残して　1983年　劇映画

はだしのゲン　1983年　アニメーション　真崎守監督　茨城映画センター配給

おこりじぞう　1983年　27分　アニメーション　板谷紀之･河野秋和監督　翼プロダクション
原爆を描いた映画の中で、おそらくこの人形アニメほど多くの人々に愛され、多くの観客動員を記録した作品はないだろう。原作は山口勇子さん。小学校の教科書にも掲載された。映画の中ではわずか20センチほどの人形がとてもリアルに動く姿。なんとも可愛らしく好評である。おじぞうさんのやさしい顔が、ゆっくりとおこった顔になりながら涙を流すところなど圧巻である。

白い町ヒロシマ　1985年　103分ドキュメンタリー山田典吾監督

24000年の箱船　1986年　33分　ドキュメンタリー高橋一郎監督

風が吹くとき　1986年　81分　アニメーション　ジェームズ・T・ムラカミ監督　イギリス映画

SOSこちら地球　1987年　62分　人形アニメーション　河野秋和監督

もうひとつのヒロシマ　アリランの歌　1987年　58分　ドキュメンタリー　朴壽南監督

さくら隊散る　1988年　110分　劇映画+ドキュメンタリー　新藤兼人監督

夏服の少女たち　ヒロシマ・昭和20年8月6日　1988年　30分　アニメーション

HELLFIRE:劫火－ヒロシマからの旅－　1988年　58分　ドキュメンタリー　ジャン・ユンカーマン

TOMORROW 明日　1988年 105分 劇映画 黒木和雄監督
1945年8月8日の長崎で、一組の結婚式が行われようとしていた。花嫁は看護婦のヤエ、 花婿は工員の中川庄治。戦時下ゆえ、いつ空襲になるかわからないこともあり、つつましやかに執り行われた。写真を撮り終えたところで姉のツル子が陣痛を訴えた。ツル子の家には産婆がやってきて、「産まれるのは夜になるだろう」と言う。母、ツイはツル子のために小豆をお手玉から取り出して煮て食べさせてやった。ヤエの妹、昭子は恋人英雄に赤紙が来たことを知らされる。誰もが明日に向かって精いっぱい生きていた。そして8月9日の朝...。

千羽づる　1989年　96分　劇映画　神山征二郎監督

黒い雨　1989年　13分　劇映画　今村昌平監督
昭和20年8月6日、広島に原爆が投下された。その時郊外の疎開先にいた高丸矢須子 は叔父、閑間重松の元へ行くため瀬戸内海を渡っていたが、途中で黒い雨を浴びてしまった。20歳の夏の出来事だった。5 年後矢須子は重松とシゲ子夫妻の家に引き取られ、重松の母、 キンと4人で福山市小畠村で暮らしていた。地主の重松は先祖代々の土地を切り売りしつつ、同じ被爆者で幼なじみの庄吉、好太郎と原爆病に効くという鯉の養殖を始め、毎日釣りしながら過ごしていた。村では皆が戦争の傷跡を引きずっていた。

ながさきのこうま　1989年 27分 アニメーション　河野昭和
戦争で犠牲になるのは人間だけではない。命あるすべてのものが、一発の原爆でみな焼き殺されてしまう。その中には、母馬と子馬もいた。この原作は大川悦生によるもので、人形アニメ。かわいい子馬を主人公に、他の動物たちもユニークなキャラクターで加わっている。楽しく観るうちにも平和と生命の尊さを感じ、すてきなメルヘンである。

ヒロシマ 母たちの祈り　1990年　30分　ドキュメンタリー　小笠原基生

ビキニの海は忘れない　1990年　62分　ドキュメンタリー森康行監督
高知県の幡多高校生ゼミナールが地域の被爆者調査を取り組んでいたとき、1954年のビキニ被災船が856隻以上、被災した廃船の発見。被災者の妻、母親との会い聞き取り調査を行い、ビキニ事件が現代も続いている地域の核問題だと知る。高校生のいきいきした姿は必見。ナレーターは吉永小百合。

資料❺　原爆・核実験・放射能汚染・内部被曝について考える映画・映像

八月の狂詩曲（ラプソデー）　1991年　98分　劇映画　黒澤明監督　黒澤プロ
「生きものの記録」（1955年）以来、核の恐怖を持ち続ける黒澤明監督が、村田喜代子の「鍋の中」を映画化。長崎の片田舎に住む老女鉦（村瀬幸子）の一夏を描き、原爆への怒りを訴える。ハワイから来た米人親族のラークにリチャード・ギアが出演。音楽は池辺晋一郎。

ヒバクシャ世界の終わりに 1991年　ドキュメンタリー　116分　ｶﾗｰ　監督　鎌仲ひとみ
劣化ウラン弾の後遺症に苦しむイラクの子どもたちとの出会いから始まった鎌仲監督のヒバクシャの声を聞く旅は、低線量被曝の恐ろしさを警告し続けている広島の被爆医師肥田舜太郎と出会う。彼とともに米国に飛び、長崎原爆のプルトニュームを作ったハンフォードを取材。核工場に汚染された土地で暮すヒバクシャたちと、汚染されたポテト。自覚無きヒバクシャの広がりに慄然とする。

つるにのって　1993年　28分　アニメーション　有原誠治監督
小学６年生のとも子は、夏休みに広島の原爆資料館を訪れ、平和公園で少女サダコと出会う。そこから不思議な冒険が始まって…。5年に渡る市民運動によって日英仏語版などが作られ、65カ国以上に贈られた心温まる作品。子ども・おとなも、見れば思いを同じくして語り合うことができる。黒い雨から地球を守る傘として描かれるのは、日本国憲法。人間が作る未来を信じる力が湧いてくる。

ヒロシマが消えた日～人類最大のあやまち・原爆～　1994年　77分　ドキュメンタリー　ドキュメンタリー工房製作

引き裂かれた長崎～人類最大のあやまち・原爆～　1994年　75分　ドキュメンタリー　ドキュメンタリー工房製作

原発導入のシナリオ～冷戦下の対日原子力政策～　1994年　44分　テレビドキュメンタリー　東野真

隠された被曝労働～日本の原発労働者～　1995年　24分　テレビドキュメンタリー　イギリス

あの日　この校舎で ―五十年前に被爆したナガサキの記憶―　1996年　30分　ドキュメンタリー　吉川透監督

はとよ ひろしまの空を　1999年 21分 アニメーション　矢吹公郎

H story　2001年　諏訪敦彦監督　原案：マルグリット・デュラス　ベアトリス・ダル、町田康　東京テアトル配給
前作『M/OTHER』でカンヌ国際映画祭批評家連盟賞を受賞した諏訪敦彦監督が、故郷の広島を舞台に『二十四時間の情事』のリメイクに挑戦。その企画が消滅していく過程をスリリングに画面に収めていく。フィクションとドキュメンタリーを交錯させた異色作だ。主人公を『ガーゴイル』のベアトリス・ダルが演じ、個性的な魅力を放つ。
諏訪敦彦監督による『24時間の情事』のリメイクの撮影が始まった。が、主演ベアトリス・ダルはシナリオの言葉に違和感を感じ、演技できなくなってしまう。そこに作家、町田康が現れる。

核のない21世紀を　ヒロシマからのメッセージ 2000年　60分　ドキュメンタリー　片桐直樹監督

太陽をなくした日　2002年17分

父と暮らせば　2004年　黒木和雄監督　宮沢りえ　原田芳雄　浅野忠信　パル企画
「TOMORROW／明日」「美しき夏キリシマ」に次いで黒木和雄監督が戦争の記憶を映画化。自分の眼の前で父（原田芳雄）を広島原爆に失った娘美津江（宮沢りえ）が、父の幻影とともに生きる井上ひさしの同名戯曲を脚色。明快な劇作法に広島の悲劇に新しい照明を。

ＮＡＧＡＳＡＫＩ　１９４５ アンゼラスの鐘　２００５年　アニメーション　８０分　有原誠治監督
ナガサキ、１９４５年８月９日。浦上第一病院に務する医師、秋月辰一郎は自らも被爆しながら必死の医療活動を続けていた。残された医薬品はごくわずか、原因不明の死を遂げる患者たち。治療は困難を極めたが、秋月は決して諦めることはなかった。そして明らかになった放射線による死の同心円―。被爆60年を記念し、次代を担う世界の人々へ贈られた、実在した医師の物語。

The Last Atomic Bomb （最後の原爆）2005年　92分　ドキュメンタリー　ロバート・リクター

夕凪の街 桜の国　2007年　118分　劇映画　佐々部清

ヒロシマ ナガサキ 2007年　86分　ドキュメンタリー　スティーブン・オカザキ監督

フラッシュ・オブ・ホープ　世界を航海するヒバクシャたち　61分　2009年　エリカ・バニャレロ監督

ヒロシマ・ピョンヤン 捨てられた被爆者　2009年90分　ドキュメンタリー　伊藤孝司監督

アトミック・マム　2010年　87分　ドキュメンタリー　Ｍ・Ｔ・シルビア監督

二重被曝　語り部・山口の遺言　2011年　68分 ドキュメンタリー　稲塚秀孝監督

棄てられたヒバク～証言・被災漁船の50年目の真実～　2011年　57分　テレビドキュメンタリー　伊東英朗ディレクター　シグロ、ザジフィルムズ

ニュークリア・サベージ　2011年　87分　ドキュメンタリー　アダム・ジョナス・ホロヴィッツ

はだしのゲンが見たヒロシマ　2011年　77分　ドキュメンタリー　石田優子監督
漫画家、中沢啓治が自身の生い立ち、広島での被爆体験から『はだしのゲン』を描くまでの半生を語る。広島市内の思い出の土地を辿りながら証言、貴重な原画とともに決して忘れてはならない戦争と原爆の姿を見つめる。「私という被写体を通して戦争と核のない世界が少 しでも近づけばいいと思っています。」「漫画で原爆をとっちめてやる。」中沢さんが渾身の力を込めて、子どもたちへ贈る永遠の平和へのメッセージ。

放射線を浴びたX年後　2012年　83分　伊東英朗監督
1954年のビキニ水爆実験。当時、多くの日本の漁船が同じ海で操業していたにもかかわら ず、第五福龍丸以外の被ばくは、人々の記憶や歴史からも消し去られていった。闇に葬られようとしていたその重大事件に光をあてたのは、地道な調査を続けた教師や高校生達。その足跡を丹念にたどる8年にわたる長期取材の中で、明らかになっていく船員たちの衝撃的なその後...。2015年『放射線を浴びた [X 年後] 2』(86 分)も完成。

資料❺　原爆・核実験・放射能汚染・内部被曝について考える映画・映像

未来へのメッセージ 神奈川のヒバクシャが伝えたいこと
2012年　21分　近藤正典監督

ブラジルに生きるヒバクシャ　2012年　78分　ドキュメンタリー　ロベルトフェルナンデス監督

アオギリに託して　2013年　120分　劇映画　中村柊斗監督

原爆症認定集団訴訟の記録　おりづる　2013年　ドキュメンタリー　有原誠治監督

放射線を浴びたX年後Ⅱ　2015年　86分　伊東英朗監督
一歩でも二歩でも　2015年　54分　ドキュメンタリー　有原誠治監督
。
ヒロシマそしてフクシマ　2015年　80分　ドキュメンタリー　マルク・プティジャン監督
フランス人監督が追う肥田舜太郎医師96歳最後の闘い。肥田舜太郎医師のことを話す時、誰もが「肥田先生」と親しみと尊敬を込めて呼びます。肥田先生は原爆投下の 1945 年 8 月 6 日 以来、若い軍医としてずっと広島で被爆者の治療にあたりました。そのうち、この日広島にいなくて爆撃を直接身に受けなかった人々が、後になって突然発病し、被爆者と同じ症状を示して死 んで行くという例を数多く目撃しました。それが内部被曝によるものであることを突きとめた先生は、それまで知られなかった内部被曝というものの脅威を世界に向けて訴え続けてきました。

この世界の片隅に　2016年 126分 アニメーション 片淵須直監督
1944年広島。18歳のすずは、顔も見たことのない若者と結婚し、生まれ育った江波から20 キロメートル離れた呉へとやって来る。それまで得意な絵を描いてばかりだった彼女は、一転して一家を支える主婦に。工夫を凝らしながら食糧難を乗り越え、毎日の食卓を作 り出す。やがて戦争は激しくなり、日本海軍の要となっている呉はアメリカ軍によるすさまじい空襲にさらされ、数多くの軍艦が燃え上がり、町並みも破壊されていく。そんな状況で も懸命に生きていくすずだったが、ついに 1945 年 8 月を迎える。

広島原爆 魂の撮影メモ ～映画カメラマン 鈴木喜代治の記した広島　2016年　29分　ドキュメンタリー　能勢広監督

いしぶみ　2016年　85分　ドキュメンタリー　是枝裕和監督
碑(いしぶみ)に刻まれた旧制・広島二中の一年生321人幼くしてこの世を去った彼ら が最期に残した言葉とは― 昭和20 年 8 月 6 日は、朝から暑い夏の日でした。この日、 広島二中の一年生は、建物解体作業のため、朝早くから本川の土手に集まっていました。端から、1、2、3、4・・・と点呼を終えたその時でした。500 メートル先の上空で爆発した原子爆弾が彼らの未来を一瞬にして奪ったのです。少年たちは、元気だった最後の瞬間、 落ちてくる原子爆弾を見つめていました。 あの日、少年たちに何が起こったのでしょうか…。

いのちの岐路に立つ　核を抱きしめた日本　2017年　110分　原村政樹監督
あの福島第一原発事故から6年。避難地域の解除が進む中で、放射能の「緩慢なる脅威」 がひろがり、原発崩壊が故郷崩壊に連鎖していく。“唯一の被爆国”を喧伝して敗戦72年を迎えた。ヒロシマ・ナガサキの被爆死者 214,000 人。ビキニ水爆実験による船員たちの被爆、原発労働者の被曝がつづく。なぜ、原発再稼働にこだわり、核による厄災を繰り返すのか。 今や放射線危険管理区域マークが日本列島におおいかぶさっている。保守・革新やイデオロギー、老若男女を問わず、誰もが「いのちの岐路」に立っている。

いしぶみ　2016年　85分　ドキュメンタリー　是枝裕和監督
碑(いしぶみ)に刻まれた旧制・広島二中の一年生321人幼くしてこの世を去った彼らが最期に残した言葉とは― 昭和20年8月6日は、朝から暑い夏の日でした。この日、 広島二中の一年生は、建物解体作業のため、朝早くから本川の土手に集まっていました。端から、1、2、3、4・・・と点呼を終えたその時でした。500 メートル先の上空で爆発した原子爆弾が彼らの未来を一瞬にして奪ったのです。少年たちは、元気だった最後の瞬間、 落ちてくる原子爆弾を見つめていました。 あの日、少年たちに何が起こったのでしょうか…。

西から昇った太陽　2018年　75分　ドキュメンタリー・アニメーション　キース・レイミルク監督
1954年3月1日、第五福竜丸の乗組員たちは太平洋上で巨大な水爆実験を目撃した。「西から太陽が昇ったぞ!」。映画「西から昇った太陽」は、水爆実験に遭遇するという怖ろしい出来事が漁師たちにもたらした苦悩と人生の困難を当時を体験した乗組員3名のインタビューと1000 枚を超えるイラストによるストップモーションアニメで再現した。製作チームは体験者の生の声を映像化することを目指した。イラストと CG の独特な味わいと、静かな語りから 悲しみが立ち昇る。アメリカの若手作家たちが、新しい第五福竜丸の物語を創りあげた。

ヒロシマナガサキ最後の二重被爆者　2019年　90分　ドキュメンタリー 稲塚秀孝監督
1945 年8月6日、9日。広島と長崎に投下された原子爆弾を、両市で被爆した山口彊さんに迫ったドキュメンタリー。二度の被爆を世界に伝え「人間の世界に核はあってはならない」と核廃絶を訴え、国際連合、長崎市内で活動を続け、2010年1月、93 歳で生涯を終えた山口さんを描いた。それから8年、14歳の夏、広島で被爆し、弟と共に避難列車で、故郷長崎に向かい、 二度被爆をした福井絹代さんと弟の国義さんの過酷な人生とさらに長崎に住む2名の二重被爆者。そして故山口彊さんの“遺志”を受け継いだ、娘、孫、ひ孫の3代に渡る“継承”を描く。

長崎の郵便配達　2021年 97分 ドキュメンタリー　川瀬美香監督
戦時中にイギリス空軍の英雄となり、退官後は英国王室に仕えたピーター・タウンゼンド大佐。彼は、長崎で被ばくした少年、谷口稜曄さんを取材し、1984 年にノンフィクション小説「THE POSTMAN OF NAGASAKI」を発表する。谷口さんは 16 歳の時に郵便配達 中に被ばくし、その後生涯をかけて核廃絶を世界に訴え続けた。映画ではタウンゼンド大佐の娘で女優のイザベル・タウンゼントが 2018 年に長崎を訪れ、著書とボイスメモを頼りに 父と谷口さんの思いをひも解いていく姿を追う

サイレントフォールアウト　乳歯検査が語る大陸汚染 2023年 81分　伊東英朗監督
1951年からアメリカ国内で始まった核実験は928回に及んだ。核実験によって生まれた膨大な量の放射性物質は、アメリカ各地に運ばれ、地上を汚染し続けた。アメリカ原子力委員会は、放射性物質が全米の牛乳を強く汚染していることを把握していたが、国民に知らせなかった。1950 年代半、大陸が放射能汚染していることを国民は徐々に知ることなり、とくに放射能汚染の影響が強いとされるセントルイスで女性を中心とした大きな動きが生まれる。「乳歯調査」と呼ばれる市民運動だった。

＊被爆者の声をうけつぐ映画祭実行委員会発行「被爆者の声をうけつぐ映画祭のすすめ」ほかを参考にさせていただきました。
＊作品の解説が入っているものは「憲法を考える映画のリスト」2024年版の作品解説から転載しました。
＊作品解説などまだ記載していないものがありますが、順次追加して完全なものにして行きたいと思います。

資料❻　戦後教育関連年表　（１）

【年月】	【教育問題の動き】	【国内外の動き】
1946年 昭21	6月：第一次米国教育使節団来日、教育の国家統制の排除と民主化を求める 11月：日本国憲法公布	
1947年 昭22	3月：教育基本法、学校教育法公布･施行 5月：日本国憲法施行 学習指導要領一般編（試案･教育の指導の目安）刊 新学制（六･三･三･四制）発足	
1948年 昭23	6月：教育勅語、軍人勅諭など衆･参両院で失効決議 教育委員会法公布（公選制）	
1950年 昭25	5月：**教職員追放令**（レッドパージ）公布 8月：第二次米国教育使節団来日、**日本国民を反共の城塞に** 10月：**文部省、学校の祝日･行事に国旗掲揚、君が代斉唱を進める通達。天野文相、修身科復活論を表明** 12月：**地方公務員法公布。地方公務員、公立学校教員の政治活動･争議行為を禁止**	5月：朝鮮戦争始まる 12月：世界人権宣言
1951年 昭26	2月：文部省、道徳教育振興方策を発表	9月：対日平和条約、日米安全保障条約調印
1952年 昭27	8月：文部省初等中等教育局に特殊教育室設置	
1953年 昭28	10月：文部省「教育上特別な取り扱いを要する児童生徒の判別基準について」通達 池田･ロバートソン会談、**米国に「愛国心教育」を約束し、自衛力漸増などの共同声明発表**	
1954年 昭29	**教育二法（政治的中立･教育公務員特例法）成立**（＊１）	3月：第5福竜丸被爆・6月：防衛庁設置･自衛隊法公布
1955年 昭30		8月：原水爆禁止日本協議会できる・ 9月：砂川闘争
1956年 昭31	新教育委員会法成立･公布（任命制）	12月：日本、国連加盟
1957年 昭32	10月：**教育課程審議会が道徳の時間の特設を決定** **教員の勤務評定実施方針決定**	10月：ソ連スプートニク打ち上げ西側より先に成功
1958年 昭33	4月：学校保健法公布 8月：道徳の時間―学校教育法施行規則（小学･中学） 10月：**学習指導要領改定官報に告示、行事等に「国旗を掲揚し『君が代』を斉唱させることが望ましい」能力適性重視** 中学職業科→技術家庭科（小学校共修・高校家庭科選択制）	
1959年 昭34	2月：中教審「特殊教育の振興充実について」答申	
1960年 昭35		5月：新安保条約を自民単独で強行採決･安保闘争
1961年 昭36	10月：中学二･三年生全員に全国一斉学力テストを実施（66年まで）	
1964年 昭39	10月：学力テストの一斉実施を中止し、20%抽出調査に変更	8月：ベトナム戦争始まる

【年月】	【教育問題の動き】	【国内外の動き】
1965年 昭40	6月：第一次**家永教科書裁判**第一審提訴	8月：日韓基本条約調印
1966年 昭41	5月：旭川学力テスト事件第一審判決 10月：**中教審「期待される人間像」**答申	建国記念の日を公布
1967年 昭42	5月：文部省「道徳教育の諸問題」を全国小･中学校に配布 全国一斉学力テストを全面廃止 6月：家永教科書裁判第二次訴訟東京地裁提訴	12月：佐藤首相、非核三原則表明 12月：国際人権規約国連総会裁決
1968年 昭43	7月：学習指導要領「教育の現代化」	
1970年 昭45	7月：家永教科書検定第二次訴訟杉本判決、国民の教育権を明示（教育への不当な支配／記述内容の当否に及ぶ検定は違憲（21条） 第二審被告高裁控訴	
1971年 昭46	中教審答申（四六答申、教員の資質向上）、第三の教育改革をめざす	
1972年 昭47		5月：沖縄県本土復帰 9月：日中国交樹立
1973年 昭48	10月：**筑波大学法案**可決	1月：南北ベトナム統一
1974年 昭49	7月：第一次家永教科書裁判第一審地裁判決　第二審高裁提訴	
1976年 昭51	旭川学力テスト事件最高裁判決（閣下の教育権か国民の教育権か二元論／子どもの学習権／教育の自由は合法範囲内）	
1977年 昭52	7月：学習指導要領改訂「ゆとりと充実」（**「君が代」を国歌化**）	
1978年 昭53	国際人権条約批准（社会権）	8月：日中平和友好条約調印
1979年 昭54	国際人権条約批准（自由権） 8月：養護学校義務制実施 共通一次試験実施開始	国連「女子差別撤廃条約」採択 国連国際児童年
1981年 昭56		国連国際障害者年
1984年 昭59	8月：臨時教育審議会設置、一次～四次（八四～八七）答申	
1985年 昭60	8月：文部省、**入学式･卒業式に日の丸掲揚･君が代斉唱の徹底を通知**	国連「女子差別撤廃条約」日本批准
1986年 昭61	第一次家永教科書裁判第二審東京高裁判決（国の主張を全面採用）	7月：中曽根首相、戦後政治の総決算を主張
1988年 昭63	天皇の病状悪化に伴い自粛、歌舞音曲制限	
1989年 平元	半旗掲揚の強制 3月：学習指導要領改訂「新しい学力観」「入学･卒業式においては国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導する：（義務化） 10月：第3次家永裁判東京地裁判決	1月：昭和天皇没

資料❻　戦後教育関連年表　（２）

【年月】	【教育問題の動き】	【国内外の動き】
1990年 平2	子どもの権利条約国連採択	10月：バブル経済崩壊 東西ドイツ国家統一
1991年 平3	3月：学習指導要領改訂「観点別評価の導入、絶対評価へ」 健康な地球のための女性会議	1月：湾岸戦争始まる
1992年 平4	9月：学校週5日制（第二土曜）スタート	6月：PKO協力法成立 自衛隊初の海外派遣
1993年 平5	2月：高校入試から業者テスト排除 中学校家庭科必修（男女） 10月：第3次家永裁判高裁判決	7月：五五体制崩壊
1994年 平6	高校家庭科必修（男女） 「子どもの権利条約」（生きる権利･守られる権利･育つ権利･参加する権利）日本批准	ユネスコ障害者もともに学ぶ「サラマンカ宣言」採択
1995年 平7	4月：学校週五日制が月二回に 9月：東京中野区教育委員会の準公選廃止 9月：日教組「日の丸･君が代」闘争から撤退、文部省との協調路線へ	１月阪神大震災で学校が避難所になる 4月：オウム真理教サリン事件
1997年 平9	8月：第3次家永裁判最高裁判決 ジェンダー平等教育に対するバックラッシュ	6月：神戸で児童連続殺傷事件
1998年 平10	12月：学習指導要領改訂「生きる力」 中高一貫教育の選択的導入（学校教育法一部改訂） 君が代斉唱･日の丸掲揚文部省通達	
1999年 平11	1月：広島県立世羅高校長、国旗･国歌強制問題に悩み自殺 8月：国旗国歌法成立 女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約の選択議定書採択（リオデジャネイロ）	5月：周辺事態法等の新ガイドライン三法成立
2000年 平12	男女混合名簿の推進 12月：教育改革国民会議最終報告（教育基本法見直しを含む十七の提案）	２月：衆参両院に憲法調査会が発足
2001年 平13	1月：文部省、科学技術庁を統合し、文部科学省発足 文科省、十七の提案に即する「二十一世紀教育新生プラン」策定 二十一世紀特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議 「二十一世紀特殊教育の在り方について――一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について」（最終報告） 3月：40人以下学級を可能にする改正定数法成立 4月新しい歴史教科書を作る改編の中学校教科書検定パス 東京都品川区で小学校選択制実施	9月：米国で同時多発テロ 10月：テロ特措法成立。自衛隊の後方支援が可能に

【年月】	【教育問題の動き】	【国内外の動き】
2002年 平14	文科省、確かな学力の向上をめざすアピール「学びのすすめ」発表 文科省、『心のノート』全小中学生に配布 文科省、学校教育法施行令一部改正（盲･聾･養護学校への就学基準及び就学手続きの見直し） 完全学校週五日制実施 中教審、「青少年の奉仕・体験活動の推進策」答申 教科書検定調査審議会、学習指導要領の範囲を超える記述を認める決定 中教審、教育基本法「改正」中間報告発表	
2003年 平15	3月：中教審、教育基本法「改正」最終答申発表 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議「今後の特別支援教育の在り方について」最終報告発表 7月：都立七尾養護学校性教育事件 12月：学習指導要領一部改訂（基準性を明確にするとともに「～は扱わない」などの歯止め規定を緩和）	3月：イラク戦争始まる 6月：有事法制三法成立 8月：選択的夫婦別姓日本の「差別的規定」に関係して勧告
2004年 平16	1月：文科省、「小中学校におけるLD（学習障害）、ADHD（注意欠落／多動性障害）、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）」発表	
2006年 平18	10月：首相直属教育再生会議発足 12月：**「改正」教育基本法成立**、国家のための教育へ 「権力の不当な支配に屈することなく」が外される	
2007年 平19	4月：学校教育法、教育職員免許法・教育公務員特例法、地方教育行政の組織及び運営に関する法律（教育三法）を「改正」し「改正」教育基本法を実働化 公立小･中学校に全国一斉学力･学習状況調査を実施 特別支援教育発足 5月：改正児童虐待法成立 6月：三法改正成立 9月：全国学力･学習状況調査（犬山市不参加） 9月：沖縄、中高教科書検定撤回を求める11万人集会「集団死に関し軍の強制」を認めるように求める 11月：給食の趣旨･目的を栄養改善から食育に	１月：防衛庁が「省」に昇格 5月：改憲手続き法成立 「改正」少年法成立。（処罰対象を14歳まで下げ、少年に対する警察の調査権限導入等） 赤ちゃんポスト設置 9月：安倍辞任
2008年 平20	3月：学習指導要領改訂（幼･小･中）公示	
2009年 平21	1月：学校に於ける携帯電話等の取り扱い通知 3月：学習指導要領改訂（高）公示	5月：裁判員制度開始 8月：民主党政権誕生
2010年 平22	3月：七尾養護学校事件最高裁確定（都議らの行為は学校の性教育への介入干渉、教育の自主性を歪める危険性、原告に賠償命令） 4月：公立高等学校無償化開始 生徒指導に関する学校･教職員向けの基本書「生徒指導提要」配布	

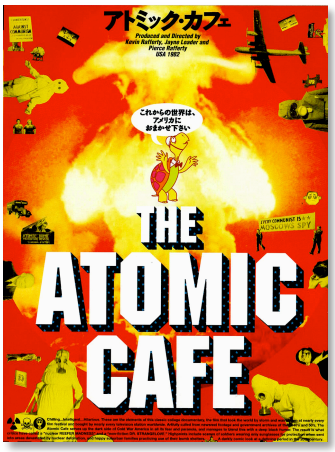
資料❻　戦後教育関連年表　（３）

【年月】	【教育問題の動き】	【国内外の動き】
2011年 平23	３月：文科省「小学校道徳読み物資料」発表 「教育の情報化ビジョン」発表 4月：小学校新学習指導要領全面実施 最高裁「思想、良心の自由に間接的な制約」あり「制約には必要性、合理性がある」類似裁判多数	３月：東日本大震災･福島第一原発炉心溶融
2012年 平24	4月：中学・支援学校中等部新学習要領全面実施 7月：中学での武道必修化開始 最高裁日の丸･君が代不斉唱･不起立による命令違反で戒告処分は妥当だが、言及･手職処分は重すぎるという判断、損害賠償30万円認める	12月：第二次安倍内閣発足
2013年 平25	3月：教育再生三本の矢（英語･理数系･情報通信技術） 6月：いじめ防止対策推進法成立 12月：『心のノート』『私たちの道徳』への全面改訂	9月 ：東京五輪招致決定 12月：秘密保護法成立
2014年 平26	４月：『私たちの道徳』配布 6月：地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部改正（新たな教育委員会制度――新教育長規定）	
2015年 平27	9月：高校生の政治活動を限定的に認める通知を文科省発出	6月：選挙年齢18歳以上に引き下げ 9月：戦争法強行採決 11月パリ同時多発テロ
2016年 平28	12月：教育機会確保法成立	4月：熊本地震 5月：オバマ広島訪問 7月：津久井やまゆり園事件 8月：明仁退位表明 11月：トランプが米大統領当選
2017年 平29	3月：学習指導要領改訂（「主体的･対話的で深い学び」、小学校外国語親切･銃剣道明記）	6月：共謀罪法成立 8月：第三次安倍内閣、安倍首相九条改憲宣言
2018年 平30	3月：学習指導要領改訂、高校2022年より、地歴（地理総合、地理探求、歴史総合、日本史探究、世界史探究）公民（公共、倫理、政治経済）からの選択、憲法が教えられなくなる 4月：小学校道徳の教科化完全実施（2015～2017年経過措置） スポーツ庁運動部活動に関する総合的なガイドライン策定	1月：旧優生保護法で国家賠償求めて茨城の女性提訴 2月：森友問題記録改ざんで佐川宣寿長官辞任

【年月】	【教育問題の動き】	【国内外の動き】
2019年 令元	4月：中学校道徳の教科化完全実施（2015～2018年経過措置） 6月：在留外国人日本語教育推進法成立 6月：学校教育の「情報化」推進に関する法律施行（Society5.0時代） 8月：「GIGAスクール構想」実現 2019年度補正予算化（ITによるいじめ、プライバシー問題、教育の中立性への政府による干渉など問題多い／文部科学省と経済産業省による押しつけ／脅威ｋン全体の合意討議や親権者の考え･意向が反映されない） 11月：大学入試英語民間試験導入等延期 12月：教育に対する一年単位の変形労働時間制導入を可能にする改正給徳法改正	２月：辺野古埋め立ての是非を問う県民投票（71.8%反対） 5月：代替わり（明仁退任･徳仁即位）元号令和に ７月：京都アニメスタジオ放火殺人事件 ８月：森友学園問題で大阪地検全員不起訴処分・捜査終結 8月：国際芸術祭「あいちトリエンナーレ2019『表現の不自由展・その後』3日で中止10月制限付き再開 10月：東電旧経営陣3人に無罪判決・第4次安倍内閣・即位礼 11月：大嘗祭 12月：川崎市人権条例採択（問題の付帯決議付き）
2020年 令2	3月：2022年からの中学教科書で「沖縄の集団自決への軍の指令･強制」の記述がなくなっていることがわかる	
2021年 令3	3月：同性婚を認めないのは「違憲」　札幌地裁 夫婦別姓への民法改正の運動 立法化への動き進むも自民反対により頓挫 3月：ジェンダーギャップ指数世界120位（世界経済フォーラム） 2020年以降、高校公民に「公共」導入（高校の道徳教育）	

※この年表は、書籍『**戦争は教室から始まる**』の中の「戦後教育関係年表」を元に、加筆させていただいて作成しました。まだ未完成なものですので、みなさんからのご意見や追記をお願いします。

資料❼　第76回映画の会『アトミック・カフェ』（2024/ 6 /29） 参加者感想から



第76回の憲法を考える映画の会は、2024年6月29日、『アトミック･カフェ』を上映して政治･戦争プロパガンダについて考えました。
参加者は68人でした。

【参加票に寄せられた感想など】

●いつも素晴しい企画（上映・講演）を感謝します。
数年前より参加しておりますが、次第に足が（心が）遠のいています。映画や講演会には参加したいのですが。会場に居ることの違和感で、何度も受付まで来て帰っていました。進行・司会の方はマスクをとってもいいのではと思います。今まさにこの映画が再び繰り返されていますね。
人は限りなく残酷になれるものなのですね。
恐い映画ですが、多くの人に観てもらいたいです。
※夜間外出が辛いので残念ながらいつも早めに退出しなければなりません。（もうちょっと早いのだといいのですけどー）ありがとうございました。（K.Y.）

●映画の最初のほうに出てくる「反共」が、原爆の開発や配備のために使われたり、人々の弾圧に使われているのは、現代に大きく影響を与えていて、考えるべき題材と思いました。映画Oppennheimerでも扱われていた重いテーマと思います。核シェルターは、それで救われる人はごく一部なのに、あたかも皆が救われるような幻想を当時も今もふりまいていて、軍拡や戦争の支持の口実に使われるものだと認識しました。(N.I.)

●『アトミック・カフェ』愚かな人類が作った核兵器。その最悪の兵器をプロパガンダで拡散しようとする、これまた愚かな人類。それを無関心と恐怖心から信じて、抑止力という名で受け入れる。これまた大衆という人類の愚かさ。実験だけでも、この星をどれだけ破壊してきたのか。
愚かな人類は自らとあらゆる生物と地球を滅ぼすまでは、愚行を止めないのか!?核兵器や原発は、人類が扱かってはいけない宇宙のタブーだったのだと思う(E.S.)

●すごい映画でした。
私はアメリカにシンパシィを持った青春時代を過ごしましたが、原爆のことを深く考えるにつけ、アメリカの政府と人は違うのだ、というところに落ち着きました。しかし、ブッシュ、トランプが大統領になったころから人がマスコミ、インターネットにうおる洗脳状態に陥っているような感じがしました。この映画はそれを確信したような気がします。現在の日本の状況も、似たようなものです。本当に目を覚ましていないといけないと強く思いました。(M.A.)

●核実験の場に兵士を見学させている。
危険な場に平気で置かせている。
ひどい世界、米国の毒されている政策を映像として多くの人々に見せる意味を考える。こっけいであり、笑ってしまったり間違いだらけの映画である。果たして誰にいつ見せているのか。これを見て信じるだろうか疑問である。
ありがとうございました。考える材料になります。
（M.K.）

●「アトミック・カフェ」はユーロスペースのリバイバルで見逃がしていたので、上映はとてもありがたい。近々リバイバル上映される「風の吹くとき」と同様、作品として実に優れているので何度も観たくなります。
昨年、上映していただいた「ジョニーは戦場へ行った」も何度も観たい作品です。「午前十時の映画祭」でも取り上げられないので、もう一度企画して欲しい。(S.T.)

●アトミック・ソルジャーのようすがよくわかった。
ローゼンバーグ夫妻の電気椅子刑死の状況がよくわかった。(K.T.)

●人間の哀れなまでの愚かさと傲慢さをまざまざと見せつけられた映画でした。アメリカは共産圏を常に見い出し敵対心で相手を威嚇しているが、今ではアメリカにも中国にもロシア側にもつかない第３国が大勢出て来ている現状を日本の首脳はどうとらえているのだろうか。(F.O.)

●映画会案内をSNSでも申し込んでます。
知りあいからすすめられ、はじめて来ました。
沖縄、九州の琉球弧に基地がおかれ、町をあげてのヒナン訓練している映像（写真）と、今回の原バクヒナン訓練の映像とが重なった。
真剣に訓練をしている子供たちは最大の犠牲者。
大人は、国が流す情報をうのみにして、協力してはいけないし、きちんと学んでいきたい。
アラート???....
米国にベッタリで敵国というか日本を危険視する国をつくる日本で防衛や、平和という政府はおかしい…国民のことは向いていない。自分たちのことしか考えてない。
世界が、米国にしろロシア・ヨーロッパの国々、韓国、北朝鮮…全てがへんな方向にいってる。(K.N.)

●少しでも政治的なニュアンスがあると、特に若い人達は逃げてしまいがちな昨今です。「憲法を考える映画の会」の映画を若い人達に観て欲しい。この会のポスターやチラシを大学や高校に展示・配布できているのだろうか!?若い人達に情報を届ける有効な手だてはないものだろうか!?
(R.T.)

●毎回参加させていただいており、いつも現政権に対してまともな御意見を伺うことが出来、励みになっております。
今日は、前回の原爆のアメリカフィルムの2回目のようでとても勉強になりました。
日本の教育もひどくなり、道徳の教科書の映画「教育と権力？」（「教育と愛国」？）もよかったです。(Y.O.)

●興味深い内容の映画、ありがとうございました。(T.K.)

●トークシェアの「プロパガンダ」に流されない様にという話が印象的でした。おっしゃるとおり、原発の再稼働が心配です。「人として」というのを思い起こしてほしいです。核実験は、人体実験で、ネバダの映画俳優西部劇に出演した人々ががんで次々亡くなったという話を、本で読みました。やはり、放射能の恐ろしさを知らされていなかったので、あるいは、貧しさ由実験場へ行かざるを得なかったのか、とか、やはりパロディーっぽい。
ビキニ島が、ローゼンバーグ夫妻が悲しいですね。第５福竜丸も(Y.K.)

●「アトミック・カフェ」上映誠にありがとうございました。映像プロパガンダによる洗脳　―。やっぱりコワイです。為になりました。(T.A.)

第78回 憲法を考える映画の会

と　き：**2024年10月14日（月・休）13：30～16：30**
ところ：**文京区民センター 3A 会議室**

「沖縄の今」を考えていくプログラムを考え中です。
ご意見、ご提案をお待ちしてます。

第９回 むのたけじ反戦塾

2024年８月17日（土）
13時30分～17時
文京区民センター
2A会議室

8月21日はむのたけじさんの命日でもあります。
亡くなって8年目になります。
次回は、同じ文京区民センターですが、少し大きめの会場を用意しました。
今まで参加いただいたみなさんと、魅力的なプログラムにして行きたいと思います。

❶　映像上映「2016年憲法有明集会でのむのたけじさん反戦の訴え」（10分）ＴＶ番組「まだ101歳 むのたけじ―戦争を殺す日まで」（25分）
❷　報告と提案：今こそ、むのたけじの「反戦」とは。戦争はいらぬ、戦争をさせぬ世へ
・これまで読み合わせを行ってきた、むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』を手がかりに
・「むのたけじ反戦塾」これまでの8回の話し合いをもとに
Ｑ：今、私たちを取り巻く戦争の危険とは何か？
Ｑ：戦争をさせぬために何が出来るか？
❸　参加者、それぞれが今考えていること、問題としていることの出し合い・話し合い

＊問合せ先：090−4599−5314 武野
〒338−0006　さいたま市中央区八王子4-7-10-201
E-mail:dmuno@jcom.home.ne.jp

上映会・催し案内

8月10日（土）12時～11日16時　平和をねがう中央区民の戦争展10日18時～映画『**証言3部作　侵略戦争・中国人強制連行・20世紀からの遺言**』**11日10時半～**、映画『**南京！南京**』（月島社会教育会館ホール＝地下鉄月島駅）
8月15日（木）7時半~16時　沖縄具志堅さんハンスト連帯行動。遺骨土砂で軍事基地を作るな!（靖国神社前＝地下鉄・九段下駅）
8月18日（日）14時～　映画**「琉球弧を戦場にするな」**（東村山市中央公民館＝西武新宿線東村山駅）
8月18日（日）PFAS『**続・水どぅ宝**』上映会（板橋グリーンホール＝東武東上線大山駅）

憲法を考える映画のリスト 2024年版

新しい「憲法を考える映画のリスト 2024年版」が完成しました。できるだけ多くの人が自主上映会をできるような手の届く作品を選んでいます。
新しく付け加えた映画は71作品。全部で168作品、68ページのリストになります。
＊**「憲法を考える映画のリスト2024年版」**ご希望の方は、「憲法を考える映画の会」まで、ご住所をメールまたは郵送でお知らせください。
映画祭、上映会の会場でも販売しています
＊1部500円（＋郵送の場合送料250円）
＊お支払い方法
「憲法を考える映画のリスト2024年版」をお送りする時に、お支払い方法について書いたものを同封します。郵便振替、銀行振込でも可能ですが、郵送で（封書に1000円札を入れて）で送っていただいても結構です。
（その場合、残りの250円は「憲法を考える映画の会」上映会の案内郵送料のカンパとさせていただきます。）
＊郵便振替：口座記号･番号00170-2-729555
憲法を考える映画の会
＊銀行振込：三菱UFJ銀行 普通口座 新宿中央支店（店番469）
3726808ハナサキサトシ

＊なおリスト中に題名の間違いがありました。お詫びして訂正します。
P27「パンケーキを毒味する」→**「パンケーキを毒見する」**
P32「テレビで食えない芸人」→**「テレビで会えない芸人」**

「映画の会」案内郵送費 カンパのお願い

「憲法を考える映画の会」の案内を郵送でご希望の方に、郵送費のカンパをお願いしております。新たに郵送での案内を希望する方は、上映会の「参加票」にその旨、お書きください。また、この手元資料表紙記載の連絡先にメール、郵便、電話などでお知らせください。
郵送費のカンパは「お気持ち」の額を、映画上映会の時に「受付」のカンパ箱にお入れください。
また、上記「**憲法を考える映画のリスト 2024年版**」にあります郵便振替、銀行振込でもお送りいただけますが、郵送で（封書に1000円札を入れて）送っていただくか、84円切手を10枚程度を送っていただいても結構です。
何とぞよろしくお願いします。
（メールでの上映会案内のご希望は、これまで通り、上映会の「参加票」、またはメールでお知らせください。）

各回の手元資料バックナンバー

「憲法を考える映画の会」ホームページよりPDFをダウンロードできます。http://kenpou-eiga.com/

《MEMO》

憲法を考える映画の会

〒185-0024
東京都国分寺市泉町3-5-6-303
TEL & FAX：042-406-0502
ホームページ：http://kenpou-eiga.com/
E-mail：hanasaki33@me.com